

江戸時代 医師になる方法はさまざま

【1】医師に弟子入りして一門に加えてもらう

医師の元に弟子入りすると、まずは医師が用いる薬を調製したり、往診の際には薬箱を持ってお供をすることから修業が始まります。ある程度知識が蓄えられ、診断ができるようになると代脈といって、師の代わりに代診させてもらえるようになり、その後独立・開業しました。

【2】医学書を学んで儒者から儒医となる

儒学を修めた者であれば漢文で書かれた書物が読めるため、医学書を独学で読み、開業しました。

【3】独学で学ぶ

特殊なケースで、例えば産科医の賀川玄悦は、もともとは古銅鉄器を商ったり、按摩・鍼灸などにより生計をたてていましたが、隣家の妊婦の出産を助けたことから産科医の道を進みました。

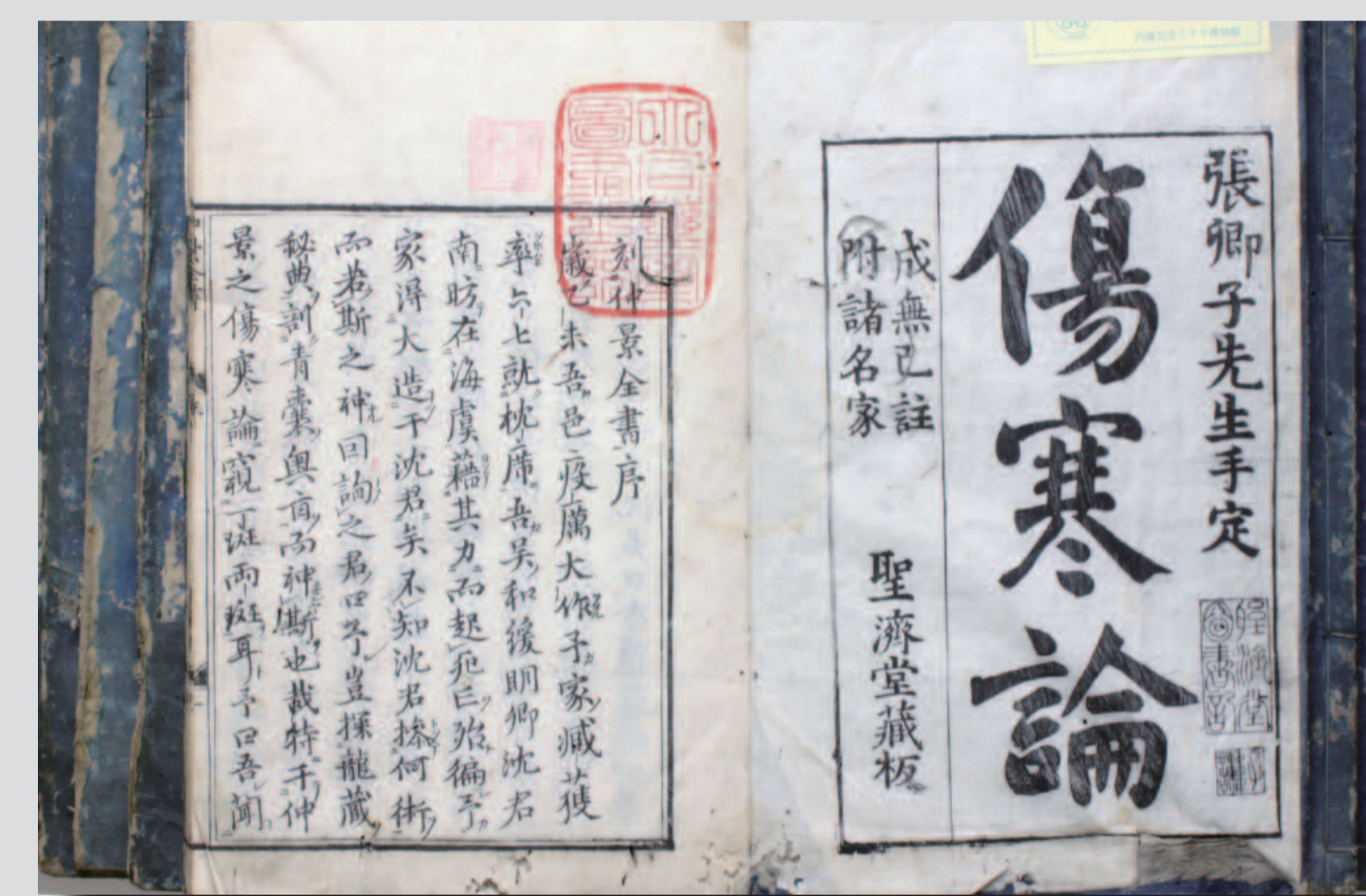
【4】経験を積んでなる

主に医師のいない地域で経験を積んで診療にあたった医師のことです。

江戸時代の医師の教科書

誰もが手にした医学書は次の4種類でした。

- ①『傷寒論』
急性熱性感染症の治療方法や薬の処方が書かれています。
- ②『黄帝内経素問』
中国医学の基礎理論が書かれています。
- ③『黄帝内経靈樞』
具体的な鍼・灸・按摩の施術方法を記載しています。
- ④『諸病源候総論』
7世紀初頭の病気の原因や症状を記載しています。



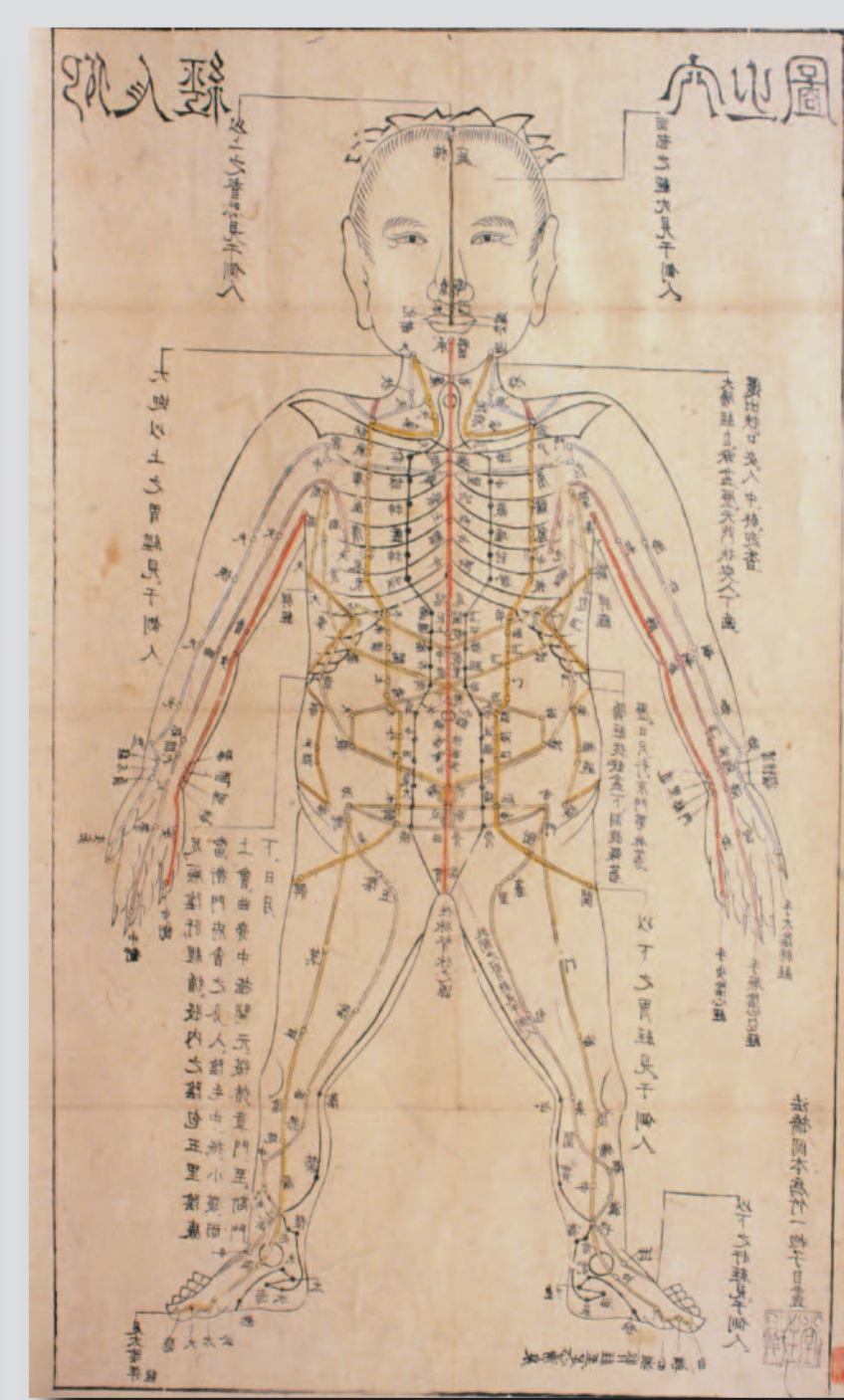
「傷寒論」

その他の重要な医学書

- 『医心方』(丹波康頼著)
日本最古の医学書で、中国の古典から病名や治療法を引用して紹介したもの。
- 『万安方』
『頓医抄』(梶原性全著)
中国の医学書の引用に加え、自分の治療経験を加えて病気別に紹介したもの。
- 内景之図
人体の仕組みを説明した五臓六腑説を图示したもの。
- 重要な経穴(=ツボ)を著した経絡図
- 『解体新書』などの解剖書



内景之図



仰人経穴之図